世田谷村日記

石山修武

九月二十八日

七時よりオフクロに色々と言われる。しかし強気の連続であった母も流石に弱気を言うようになった。早く世田谷村に居ろと言うのだが、こんな家に住めるかとまだ言い張っている。年をとって、こう言うところに住めばキット長生き間違いないのになぁ。亡くなったオヤジの所蔵していた本があって、それを先ず引き取る為の書庫を作る事になった。その書庫のプランやディテールまで指示するのだから、たまらんよ。この人、生まれ変わって建築家になったら成功するだろう。世田谷村のオフィス部分の上に書庫を乗せる事になった。九時、東京発踊り子で伊豆松崎町へ。車内は満席ではないがにぎわっている。行楽シーズンなんだ。オヤジの書庫は鉄板でやってみようか。十一時十分までオヤジの書庫のスケッチ。なんとなく、まとまりかかる。気が付けば伊豆高原辺りか。秋日和だ。十一時四十五分蓮台寺。森町長公室長と共に婆娑羅峠を越えて松崎町へ。カサ・エストレリータで商工観光課長、産業建設課長他の皆さんと打合わせ。十五時半終わる。伊豆の長八美術館故依田敬一さんの礎石の基壇に座って、遅い午後の光を浴びている。ここには様々なモノがあって、それにまつわる物語りも又、極彩色に彩られているから、私にとっては、無言劇を見ているようなモノだ。空気がざわめいているのだ。

小邨の小林のところにより、サンセット・ヒルへ。いつもの宿直室にチェック・イン。温泉に入り、一休み。職人共和国便り第二幕あくかな。十七時二〇分森さん迎えに来て、焼き肉大門へ。二〇時二〇分サンセット・ヒルに戻る。森さん、小林さんと共に食事したがお互いに当然の事ながら年を経て流石に節度は持つ様になった。四〇才前に初めて松崎町を訪ねた頃は毎晩一時二時まで飲んで騒いでいたのだから、マア、若い頃のハシカだったんだと良く解る。沼津に入院している藤井晴正とも電話で話す事ができた。あと一ヶ月は入院していると言うから、一、二度訪ねなくては。本当は傷を負った友人の姿を眼の当たりにするのは恐いんだよね。ここのところ友人を続けて失っているから、会いに行くのに自信が無い。ハンマの傷の行方がはっきりしてから会いに行くのが正解であろう。森夫人に車で宿舎まで送ってもらったのも何となく良かった。私の六〇才記念、つまり青年卒業式は松崎町でやる事にした。藤井晴正幹事長でやろうか。

深夜三時起きてしまう。昨夜は二十一時過ぎに寝てしまったんだから、これも仕方無いだろう。二〇年来の附合いになった松崎町も市町村合併の波に揺れている。これからの地域創造の核は文化・芸術の育成につきる。私も伊豆西海岸とは実ワ、高校生の頃からのお附合いで、随分育てていただいた。何か出来るとしたら、その事でお返ししたい。近藤さんからお借りした蔵の生かし方も含めて。第二ステージの伊豆西海岸再生を考えてみようか。ハンマも海の仕事を続けられるかどうか、解らないし。陸の仕事を作る必要があるのかも知れない。山本夏彦、佐藤健が亡くなってもう一年になるな。